

雑事記(41)

盛丘 由樹年

戦争遺跡探訪(13)

最近探訪したところを取り上げる。今回、主に三浦半島の海岸を歩いたが、県外へも行ってみた。

①から⑩まで、日付順に記述し、撮影した写真を添える。

① 江奈湾から毘沙門湾へ(神奈川県三浦市)

2021/8/26

江奈湾は特攻モーターボート「震洋」^{しんよう}の発進基地として、何人かの探究者(好事家?)によって報告されていた。それを確かめるために、私は行ってみた。

8月26日(木)三浦海岸駅からバスに乗った。バスはのんびりと走り、やがて江奈湾の東端にある松輪海岸・バス停に着いた。この辺はのどかな漁港になっており、海岸一帯は漁船や漁具などで占領されている。右手には、道路に沿って人々の住居や店が並んでいる。



江奈湾の松輪海岸

そのすぐ後方に小高い丘の壁が続いている。江奈湾を取り囲んでいる壁面には、震洋を隠す横穴が多くあったと言われていたが、今は壁面が全面的にコンクリートで固められており、道路沿いを歩いただけでは、見つけられなかった。

後日ネットで調べてみると、周辺の横道に入った壁にまだ横穴が残っているという情報を見つけた。事前に調べるべきだった。

ちなみに、この地域に派遣された震洋部隊の本部が置かれた福泉寺は、江奈湾から北約600メートルの下浦町にあり、それを示す石碑「第56震洋特別攻撃隊岩館部隊の碑」があるという。（以前紹介した三浦市初音町の福泉寺は誤りだった）

私は、江奈湾から西に歩き、白浜毘沙門天の神社によつてから、毘沙門天湾に入った。その神社では、毘沙門天像を拝観することを期待したが、中は暗く、扉に鍵もかかっていたので、それはできなかった。



毘沙門天洞窟の一つ
雑草をかき分けて近づく必要がある

海岸沿いを歩き、いくつかの毘沙門天洞窟を見て回った。これは昔からある海蝕洞だが、軍事に利用された可能性もある。

毘沙門漁港近くの砂浜の海岸に、コンクリート製の演壇があった。高さは80センチほどだ。ここにあることが不似合いな、ものものしさをもっている。それほど古いものではないが、旧日本軍隊に關係するものかもしれない、ふと思った。隊長が隊員に訓示するためのものだったか、と妄想した。



怪しいコンクリート台
毘沙門漁港の海岸で

② 河口湖自動車博物館飛行館（山梨県・鳴沢村）

2021/8/28

河口湖自動車博物館の付属施設として飛行館があり、歴史的な軍用機などが展示されている。民間運営の施設であり、軍用機に愛着を持っている人が携わっているのだろう。

飛行館については7〜8月の夏季限定の開館になっているので、私は8月28日に、少々慌てて行ってみました。この機を逃せば、1年後になってしまう。

ここには、旧日本軍の戦闘機や爆撃機の復元された機体や部品が展示されているというのだ。この種のマニアとしては聖地のようなところだろう。私も、前々から関心を持っていた。

車でなければ不便なところにあるので、仕方なく早朝車を走らせた。この飛行館は、「河口湖」の名を冠してはいるが、河口湖からは、かなり離れており、富士のふもとの鳴沢村にある。

富士スバルラインの手前で横道に入る。途中、車のナビゲーションに慣れてない私ほとんどでもないところへ入りこみ、遠回りさせられたが、何とか開館前の9

時半ごろに到着できた。

広めの駐車場はもう8割方、車で埋まっていた。この日は土曜だったこともあり、混んでいた。同好のマニアたちが各地から集まっていたのだろう。



C-46 コマンダー
迫力満点の大型飛行機の前で、
不審者が飛行館の開場を待つ

敷地の周辺に、大型の飛行機（米軍輸送機カーチスC-46 コマンダー、主に陸軍で使われた）や戦後に航空自衛隊で運用された歴代のジェット戦闘機（F-86F セイバー、F-104 スターファイター）など

が無造作に置かれている。古い鉄道機関車や旧式バスもあるから、かつて神田の近く、万世橋にあった「交通博物館」を彷彿させる。



F-86Fセイバー戦闘機
主翼が外されたまま、コンテナの上は無造作に置かれている。日の丸をつけているから、航空自衛隊から譲り受けたものだろう。もとは1950年代に活躍した米軍の主力戦闘機だった。

F-104といえば、高速で飛べるなど、数値的に性能が良かったが、訓練中の墜落事故が目立ち、当時の防衛庁などには嫌われてしまった機体だ。「スターファイター」という華麗な愛称は定着しなかった。(流れ星というべきだった?)

それらを見て回るうちに、定刻の10分前なのに、

もう人々が学校の体育館のような飛行館の建屋に入っていくのが見えた。入場受付が早めに始まったのだろう。さっそく私も入る。入口のところで、1500円取られた。1000円と聞いていたのに……。

「学校の体育館」は広いとは言えないが、中に所狭しと、展示物が置かれているから、目を見張る。一式戦闘機はやくまの機体などが天井から吊り下げられている。さらに床面にも、銀色の機体(塗装されていない)の隼はやぶさが置かれている。迫力満点だ。それらを間近に見ることができるところから、うれしい。

隼はやぶさといえば、陸軍の戦闘機であり、海軍のゼロ戦(零式艦上戦闘機)と比較すれば、知名度が低いのが、量産され、戦争前期にそれなりに活躍した。確かに非力な機体だったが、熟練した操縦士たちが乗りこなせば、軽快な飛行能力を発揮できた。

ただし、訓練不足の若い操縦士ならば、アメリカの高性能で頑丈な戦闘機にとっても太刀打ちできなかった彼らは飛行訓練を怠りなかったし、連絡を取りながら複数機で日本軍機に立ち向かう戦法に徹していた。

そのゼロ戦についても、ここには代表的な機種である21型と52型が置かれている。

一式陸攻の部分的な機体があるのも、珍しい。これ

は双発の爆撃機で、輸送機としても用いられた。ささいな被弾でも、すぐ燃え上がったから、米軍戦闘機にとって格好の獲物になっていったといわれる。

これらは復元されたものだ。館の職員たちは、壊れた部分（ほとんどガラクタ）を寄せ集めたり、修理したりしてできるだけオリジナルに近い形に修復し、組み立て直したものだ。組み立て中の機体もある。館内の壁際の棚や床面には、エンジンなど、多くの実物部品が並べられている。精巧な模型も展示されている。

その他、見どころが多くて、私は満足した。

それにしても、多くの部品を集めたり、大きな機体をここに運び入れたりするには、資金・技術・労力・熱意が必要だろう。その修復や保存の努力に敬意を表したい。1500円の入場料は惜しくはない。なお、館内での写真撮影は遠慮した。

隣接する車の博物館は、ガラス越しに館内をちらりと見て、スキップした。車に乗ってから、この際、見তেおくべきだったか、と少々後悔。

帰りに、飛行館へ行く途中で見かけて興味を持った「船津胎内樹形」に寄ってみた。これは富士の溶岩洞窟の一つだ。樹木が溶岩の中に閉じ込められ、焼き尽くされた後の空洞が見られる。

敷地内に比較的りっぱな神社がある。ここでは江戸時代から、洞窟を御神体として人々が信仰の対象としていたらしい。拝殿の中央に洞窟の入り口がある。「河口湖フィールドセンター」の管理事務所で、いくばくかのお金を払い、探訪してみた。



船津胎内樹形の中で
不審者が腰をかがめて洞内をゆっくり前進していた。

比較的短い洞窟ながら、複雑な立体的な形状をしており、濡れた壁面に手を付いたり、はいつくばって通り抜けるところがあつたりして緊張した。照明がところどころにあるけれど、うす暗い。狭いから、ヘルメ

ツトなどをかぶっていないと、頭に怪我をしてしまう。そこを出たあと、前に利用したことのある温泉施設に寄ってみようと思った。竈坂峠ひざかを越えたあとの須走にあるので、ドライブの休憩を取るのにもちょうどよい。通りかかると、看板が外され、それがもう閉館していたのには、興ざめだった。コロナ禍のせいで、客が来なくなっていたのだろうか。このまま施設の建屋は廃墟になってしまうのだろうか、と感慨が深まる。

③ 油壺・特攻舟艇基地（神奈川県三浦市） 2021/9/13

9月13日（月）油壺にやってきた。三浦口駅からのバスは満員だった。多くの人は油壺マリンパークに行く人たちだった。でも、油壺マリンパークはこの9月末で閉館になってしまう。もう見納めになる。

私にも入場したい気分が少しあったが、彼らとは別行動で、東大臨海実験所旧日本館の方へ足を向けた。歴史ある建屋というから、まずそれを見ようとした。しかし、行ってみると、敷地の門には厳重に鍵がかけられ、近寄れなかったし、外観を見ることもできなかった。

それだけでなく、地図に記されている新井城跡にも近寄れなかったのには、納得が行かないことだった。この辺一帯が、公共的な公園として整備される予定があるのならば。

引き返して、南側の海岸に降りる道をたどった。そこは油壺湾と称される。湾の奥には、多くのヨットが停泊しているのが見える。



油壺湾の洞窟
不審者が中をのぞき込む。
ここは兵隊たちの待機用、あるいは物資を置く地下室とみられる。

海岸には、震洋の格納洞窟跡がいくつかある。ここにも特攻兵器が隠されていたわけだ。私はこれらの洞窟の存在をいくつか確認してから、東大臨海実験所の西側の海岸に降りた。

岩場の海岸で、海面へ伸びているコンクリートの基礎を見つけた。これは、震洋を発進させるための構造物に違いない。船台に載せて海に出すものだろう。



新井浜のコンクリート軌道
震洋を沖に出すためのガイドレール
だったのだろう

岩場を抜けると、砂浜がある。新井浜といい、海水浴が可能な、こぎれいなビーチだ。まだ営業している海の家があり、ハワイ的な雰囲気を出している。都会から来たような海水浴客がちらほらしている。彼らはデッキチェアに横たわっているだけだけれど。



新井浜近くの洞穴
やはり震洋を隠すためのものか。それ
なりの大きさがある。

浜の向こうの壁面に横穴がいくつか見える。近づいてよく見ると、落石事故を防ぐためか、仕切り線が張られている。見るからに人工的な洞穴だ。これも震洋

の格納用か？

私は、マリナーパークを回りこむように、海岸線をぐるりと見て回ってから、三崎港方面への道に歩いていった。

途中、浜諸磯近辺の壁面には震洋の格納洞窟らしいものが残っていた。ほとんど入り口が塞がれていたが、その大きさと、見当が付く。

三崎港にたどり着いてからバスで帰った。ここからはバスの便がいい。なお、三崎港周辺の商店や民家のいくつかは、古い時代のもので、港町の情緒がある。

帰りに、横須賀本港に寄った。米軍の海軍基地や、海上自衛隊の基地があり、海岸のヴェルニー公園から、それらの基地に停泊する艦船が一望できるから、私はときたま訪れている。京浜急行・汐入駅から海岸に出て、JR横須賀駅まで歩くコースが定番になっている。

米軍の黒い潜水艦がよく見える。でもここでは、護衛艦「ひゅうが」の存在が大きい。

攻撃型ヘリコプターを複数搭載可能な護衛艦だが、最新鋭戦闘機F-35Bを搭載・運用するために改造が進められている。するともう外形だけでなく、実質的に航空母艦になる。同型艦の「かが」も同様に改装される予定だ。近代日本海軍の「軍備」増強の象徴だ

ろう。



海上自衛隊横須賀基地に停泊している「ひゅうが」堂々たるもの。

④城ヶ島・砲台跡（神奈川県三浦市）2021/9/21

三崎港と城ヶ島は「目と鼻の先」だが、一日で両方を見て回る体力に自信がなかったので、日を改めて訪れてみた。城ヶ島は東京湾要塞遺構の一つだ。9月2

1日（火）、城ヶ島は観光地として名が知られているけれど、閑散としていた。

この日、私は城ヶ島の東側を歩いた。たいていの人は西側に行ってしまうから、普段でも東側には人が少ない。コロナ禍の影響で、数カ所の広い駐車場がすべて閉められていた。私はバスで来ていたし、ワクチンを接種しているから、関係ないのだ。



城ヶ島砲台跡のひとつ
第二駐車場の真ん中にある

城ヶ島公園東側の第2駐車場の中に、砲台跡がある。円形の花壇にみえるのがそれだ。円形の中心に砲門が据えられていたわけだ。駐車場を整備するときに、よく壊されなかったものだが、砲台跡とは見えないくらいに改変されている。駐車場の中に花壇があっても、じやまなだけで、見向きもされないと思うが。

この写真に見えるように、コンクリートの塊が二つ並行している部分が、砲台の地下部に人が下りるための階段だった跡だ。それらはほとんど埋められているが、これを見て私は、花壇が砲台跡であることを確信した。

北側の斜面は雑木林になっている。その中に地下施設が残っているという。それは兵員の待機室、あるいは物資を貯蔵するための地下室と思われる。

私は鼻を利かせ、踏み跡がほとんど見えない箇所から斜面を降りて、その場所に行き着いた。これが斜面のどこにあるかについて、言葉で説明するのは難しい。その入り口を確かめ、写真に撮った。管理されており、ドアがしっかり閉じられているから、中には入れない。ただし、ネット情報では、中を見学するツアーが企画されたときには開かれるという。



地下施設の入り口
雑木が茂る斜面にひっそりと

城ヶ島公園の中を通り、東の先端付近に行くと、さらに複数の砲台跡などの遺跡がある。次の写真は、観測所といわれている遺構だ。これらは公式な案内図には載っていないので、一般の人は見過ごすだろう。



観測所の地下施設入り口
今は展望施設の土台になっている

城ヶ島公園は、よく整備されており、広々としてなかなかよいところだ。海岸に降りると、岩場が続いている。見て回ると、ここにも新たな発見がある。私などは、ささいな構造物でも、すぐに遺跡に結び付けてしまう。

帰りに、少々余裕があったので、相鉄線・大和駅から「泉の森公園」によってみようと思った。気まぐれな旅なのだ。そういえば、以前この公園に来たとき、

低空飛行していたF/A-18ホーネット戦闘爆撃機が発する爆音に驚いたことがある。米海軍の艦載機で主力機種だ。ここは厚木基地に近い。

「グワーン」 カミナリのような音だった。すごい！一機が去ったと思ったら、また一機……「グワーン」。

軍用機とは遠慮なく音を出すものである、と知った瞬間だった。

大和駅から西に向かうプロムナードを歩いていくと、前方の空を右から左へ、低空を飛ぶ機影が見えた。軍用機だ。一機に続いてまた一機。厚木基地の滑走路に降りてゆくものだ。

滑走路の北端近くを通る相鉄線に乗ると、軍用機の発着が見えることがあり、前々から厚木基地の滑走路近くで、写真を撮ってみたいと考えていたから、いいチャンスだと思った私は、泉の森公園へ行く道から外れ、飛行機が降りてくる方向に歩いた。

私が一番いい撮影場所を求めて歩いていくと、樹木や建屋がほとんどない広い区域に出た。それは柵で囲われているから管理されたエリアであるけれど、一部はサッカーなどのスポーツに利用されている。一般人が入れることがわかった。この辺は、騒音の問題で国が地主たちから買い上げた土地と思われる。

さらに進むと、滑走路の北端の近辺に、その延長線上に公園的エリアがある。そこには、航空機を撮影している人たちが5、6人いた。ちょうどよい。私も撮影に加わった。



米軍厚木基地の滑走路の北端で着陸態勢をとる軍用機

位置によっては、飛行機が頭の真上を飛んでいくのを撮影することも可能だが、それではおもしろくない。少し角度のある方向から撮影する。

厚木基地の滑走路に北側から進入する飛行機（ヘリ

コプターを含む）が一定の間隔を置いて飛来してくる。北側の空に一点の黒いものを見つけると、徐々に大きくなって航空機が姿を現してくる。



対潜哨戒機 P - 3 C と思われる機体が滑走路に突っ込んでいく

目の前を通るときには、かなり大きくなり、速度もあるから、なかなかカメラで捕らえることは難しい。航空機を撮影する人の多くは、高級なカメラが欲しくなるものだろう。彼らが持っているものは、見るからに重そうな高級器だ。

⑤ 湘南平・銃座跡（神奈川県大磯町）2021/9/21
9月21日に改めて大磯・湘南平に行ってみた。以前にも、このシリーズで触れたことがあるけれど、再報告する。途中、古代横穴墓の群集地を探索したあと、この丘陵に登った。

ここは千畳敷とも呼ばれる広々とした山頂で、今は駐車場完備の公園になっているが、かつて砲台陣地だった。防空拠点のひとつで、軍都・平塚の空を守る任を担っていた。戦時中、千畳敷山防空砲台と呼ばれていた。防空のための銃砲が、海の方に向けて並べ置かれていた。ただし、平塚の空襲被害は大きかったから、これが役に立ったとは言えない。

湘南平をうろろすると、足元の地面に埋め込まれた状態にある直径約80センチの円形コンクリートをいくつか見つけることができる。なかには一対の短い鎖くさりがついているものがある。これは銃座跡で、機銃を据えつけた跡といわれている。鎖は固定するものだろう。



銃座跡

地面に埋め込まれた円形のコンクリート。ほぼ上から撮影したため、撮影者の左足が写りこんでいる

湘南平のほぼ中央、北側にコンクリート製の展望台がある。これは十数段の階段を上がるだけの簡素なものだが、この後ろに砲台跡がある。直径3メートルほどのコンクリート部分だ。
おそらく、ここに置かれた砲台は旧式になり、砲身を撤去したあとに、そばに「見張り台」らしい施設を構築したものと考えられる。



砲台跡

左奥の円形の平らな部分が砲台跡。
右上は展望台。手前の四角のコンクリート台座は不明だが、何かの塔の跡だろう。

⑥ 荒崎・銃座跡(神奈川県横須賀市) 2021/10/21
10月21日、また三崎口駅から歩いて三浦半島の西海岸を歩いた。荒崎に行ってみた。
地下陣地があるという「黒崎の鼻」(初音町)によって行こうとしたが、藪の多い黒崎の鼻では何も見つけられず、和田長浜海岸に抜けるまで、かなり遠回り

をしてしまった。

終戦時に特攻基地として建設され、未使用の滑走路ができていたとされる長井飛行場跡地の一部に開園された「ソレイユの丘」を歩く予定だったが、分岐点を見落としてしまった。



荒崎の洞窟
トンネル状のものがいくつかある

遊歩道の整備された荒崎の海岸沿いを歩いてゆくと、人工的に作られたとも思える洞窟が、いくつか見つかる。荒崎の辺りは見所になっており、比較的観光客の

姿が多かった。



荒崎の洞窟と入り江
震洋を隠すにはちょうどよさそうだ。

軍の管理地だったという「荒崎公園」の高台に上っていく。一番高い位置にある芝生の広場の一角の植え込みに、機銃台らしいコンクリート構造物を一つだけ見つけた。これはネット情報にあったから、私は探していた。

私はこれで満足して「荒崎」からバスに乗った。

⑦夏島・地下施設など（神奈川県横須賀市）

2021/10/24

10月24日（日）京浜急行・追浜駅で9時集合の団体ツアーに参加した。前回7月10日の貝山周辺の遺跡見学に引き続き、それに近い夏島周辺の遺跡を見学する。参加費が500円で、低額なところがうれい。

参加人員は全部で30人ほどだったが、班に分けるときに手違いがあったためか（予約した数名が来なかった）、私の班は私を含む2人だけで、一人の案内人がつくという贅沢なツアーになった。

追浜駅から歩いて、追浜の歴史的な背景がわかるスポットなどを見て回る。戦前からの軍用の建屋や構造物が、民間工場が立ち並ぶ敷地内に一部残っているとガイドは言う。今では民間のものだから、写真を撮るのは遠慮しろ、という。

主要目的地の夏島は、駅から北東の方向にあり、周辺一帯は、最初は陸軍基地として、その後海軍基地として大規模に埋められたから、島ではなく、陸続きの、樹木が繁茂した小高い丘になっている。

ここは歴史が積層したところだ。記念的な要点を挙げると、

- ・縄文時代の貝塚・縄文人が住んでいた跡
- ・明治憲法を草案した記念碑・伊藤博文がこの近くの旅館でをまとめたことを示す石碑（旅館の消失後は、野島公園にある伊藤の別荘で行なった）
- ・明治期に東京湾に向けての砲台を設置した跡
- ・周辺の埋め立てのため、夏島の半分を切削
- ・機銃砲台跡・太平洋戦争時に横須賀海軍警備隊が据付たもの
- ・地下壕跡・太平洋戦争末期に海軍航空基地の緊急戦備施設として構築

それぞれ関連した遺構が残っており、順不同で見学して回った。なお、普段ここは柵に囲われ、扉が施錠されているから、こういうツアーでなければ入れない。私は夏島の存在を知っていて、いつか見て回ろうと思っていた。もしも、単独でふらりと訪れたら、入れずに引き返したことだろう、

地下壕に関しては、周囲の壁面にいくつつか、大きい入り口の跡が見えるが、地面の高さにあるものはほとんどコンクリートで封鎖されている。落盤などの危険

性があるのかもしれない。

周辺を回りこんでから、登山道のような道を上がっていくと、中腹に開口している壕の入り口がある。ここで見学できた。ただし、ライトで照らし、覗き見るだけで、中を探索することはしなかった。壕の奥にかすかな光が見えていたから、向こう側にも出口があるようだ。



戦中に掘られた地下壕
空襲を避けるためのもの。格子状に延び
ている。かなり大掛かりなものだ。

夏島の高い場所にある貝塚などは、周辺に貝殻が散

乱していた。われわれが踏み潰していいものだろうか、とふと疑問に思った。縄文人が貝を食べたりしてここで暮らしていたことがよくわかった。

頂上付近の別の一角には、明治期の砲台跡がある。ここに大型のりゅう弾砲を据え付け、横須賀の海域に侵入する敵艦を攻撃するための砲台だった。



横須賀防備のための砲台施設跡
ここは砲兵が待機する場所だったらしい。
弾薬庫という説もある。

地下に構築されたレンガ造りの施設（敵側からは見えないように作られている）などを見て回った。全体の施設はU字形をしており、その内側に二門の榴弾砲が据え置かれたことがわかる。

このツアーで3時間半に渡って歩き回った。

われわれ二人だけのためにガイドさん（NPO法人よこすかシテイガイド協会）が熱心に説明してくれたこと（時々つまらない質問をしたことにも答えてくれた）を感謝する。

⑧大崎・洞穴（神奈川県逗子市）2021/11/11

11月11日、鎌倉駅から歩いて逗子の大崎に行くとした。この日は、晴天だったが風が強く、大崎に行くのはどうかと危惧していた。大崎へ行く途中にある神社にも興味があったから、あえて行った。

逗子市小坪地区の披露山公園に砲台跡があることは、以前にこのシリーズで紹介したが、その西側、大崎の海岸にも戦争遺跡があるという。

私は若宮大路を海に向かって歩き、海岸沿いの道を歩いた。海では、強い波風があるのに、ウインド・サーフィンをしている人が波間にちらほらしているのだ

から、感心した。沖で漁をしている漁船も見えていた。根性のある人たちだ。

小坪地区に入ると、まず住吉神社に寄ってみた。傾斜地にある階段を上がってゆく。この神社の脇に、手掘りと思われる古いトンネルがあるというので、興味を持った。

入口の大きさは人が立って行けるほどだし、奥まで入れるので、不審者がライトを点け、入って行った。路面が傾斜しており、さらにうねりがある。地下水が

漏れ出ている滑りやすいから。トンネルとしては実用上、出来が悪い。奥が封鎖されていることを見て、引き返した。ちょっとした洞窟探検だった。

その近くに別のトンネルがある。先のトンネルの代わりに新しく作られたものとみられる。

人道用の小さなトンネルだが、それなりに趣がある。トンネルを抜けてみると、その先の山間に数軒の人家が見えた。これは、その住民が海側に行き来するため作られたわけだろう。



逗子・住吉神社近くの小さなトンネル
入口上の表示板に「住吉隧道」と書かれていた。

次に、5分ほど歩いて神明社に寄った。戦時中の防空壕らしい横穴がいくつかあるとの情報を確認するた
めだ。

確かに怪しい横穴が神社の周りにいくつかある。特に社の背面側の崖に5、6か所の横穴がある。入口に
岩石を入れてしっかり封鎖しているが、その大きさか
ら、人がかがんで出入りするものだったことがわかる。
私の見立てでは、戦時中の兵隊たちが地下陣地とし

て、固い岩盤を掘削したものだろう。寺社の背面の壁
に地下陣地を作ったことは、ほかにも例がある。
荒っぽく埋め戻されているのは、横穴が本来の神社
関係のものではなく、神職や氏子たちには歓迎されな
かったからだろう。



逗子・住吉神社裏の横穴
この写真では2か所の横穴が見えている

さて、小坪マリーナの横を通り、大崎が見える場所
に着いた。ここから海岸沿いのルートで、大崎の先端
にある八大竜王大神の社のところまで行こうと思つて

いたが、ここから先は通行止めだった。近年、落石で死亡事故があったから、と看板に書かれていた。大崎の周辺海岸の壁面にはいくつか洞穴があるとのこと、興味深いところだが、大波が海岸に打ち寄せている状況では、自由気ままな不審者といえども、あきらめざるを得ない。



逗子・大崎
壁面にいくつか洞穴があるというが、ここからではよく見えない。

⑨ 桶川飛行学校（埼玉県桶川市）2021/1/17

11月17日（水）、桶川へ行った。新宿駅で湘南ライン高崎線に乗れば、途中乗り換えをせずに行けるので便利になったものだ。（その昔、赤羽と池袋で乗り換えなければならなかった）私の場合、それがよくわかっていなく、新宿駅で湘南ライン宇都宮線に乗ったものだから、大宮で乗り換えなければならなかった。

桶川駅に着いたとき、目的のバスの発車時刻まで少々時間があったので、目についた案内板にしたがって、桶川宿を見学することにした。駅に近いく所だけ見て回った。

桶川は、その昔、中山道の宿場町で、今でも古い家屋があり、その面影が少し残っている。ただし、その道路は拡幅され、車が走り行くから、あまり情緒は期待できない。

そして、川越かわごえ行きのバスに乗り、柏原のバス停降りた。道筋に立てられた真新しい看板に案内されて、桶川飛行学校平和祈念館に向かった。

5分ほど歩くと、記念館に着く。手前に駐車場が用



旧陸軍桶川飛行学校
手前に門柱、奥に見えるのが兵舎棟。

意されているから、車での見学者を期待しているのだ。門の手前に、井戸と弾薬庫がある。弾薬庫といっても、小型の倉庫のようなものだから、ものものしさはない。これや、中に見える建屋が意外に真新しいのに、違和感を抱く。80年以上経った古い木造建築と思いきや、使われている木材が妙に新しいのだ。塗装も新しい。塗料で古色を出しているけれど。

門柱には「桶川飛行学校平和祈念館」の表札が掲げられている。人がいる気配がないが、門の扉が開いているので、こっそりと中に入る。どうやら見学者は私一人らしい。

門の左側に守衛棟、右側に車庫棟……。それぞれ順に見て回る。構内の建屋は、すべて改装されたらしく、展示用に整備されている。そして昔の小学校の校舎のような建屋、兵舎棟に入ると、ここでようやく職員らしい人が出てきて、コロナ感染予防対策の処置をする。所定の用紙に名前と住所などを記入する。入館料はタダだ。パンフレットをもらい、スリッパに履き替えて、中を見学する。

この館内には、当時の写真や説明書きを並べた部屋、航空兵の服装や遺品のようなものを展示する部屋、ベッドが隙間なく並べられた部屋などを見て回る。それぞれの部屋の大きさや基本構造は同じだ。

パンフレットによると、1937年（昭和12年）熊谷陸軍飛行学校の分校として設置され、各地から集められた生徒が、寝食を共にしながら、陸軍航空兵になるための操縦教育を受けた、とある。

昭和20年には本校の熊谷陸軍飛行学校とともに閉校となるが、代わりに終戦まで、特別攻撃隊の訓練施

設として使用された。つまり、特攻隊員の養成所になっていたという。

戦後、一時期、GHQが進駐した。



旧陸軍桶川飛行学校
兵舎棟の前でたたずむ不審者。

その後、桶川市の管理に移され、引揚者が一時的に宿泊するために使用されるようになり、市営住宅「若宮寮」として平成19年まで運営された。

相当地に老朽化していたはずであり、市の管理者は解

体することを考えたはずだが、まもなくして保存を求める声が高まったのだろう。2016年に、守衛棟、車庫棟、兵舎棟、便所棟、弾薬庫の5棟が桶川市の文化財として指定された。

復元整備工事が実施された結果、今の姿になり、2020年（令和2年）に平和祈念館として開館した。真新しさに疑問を持った私が、職員に聞いてみると、部分的に古い木材を流用しているというが、やはり全面的に新しく復元したものなのだ。

真新しいわけが分かった。80年ほど前の、当時の陸軍飛行学校の生徒たちにとっては、この真新しさが実感されていたわけだ。

操縦教育に使われた機体（九五式I型練習機）は、赤く塗られた複葉機であり「赤とんぼ」と呼ばれていたものだ。そんな旧時代の飛行機で十分な操縦教育ができたのだろうか、と私は疑ってしまう。生徒たちはここを卒業したら、多くは戦地に赴いたわけだろう。そこで、多くの若鳥たちは猛禽類の餌食になってしまったことだろう。それとも、爆弾を抱えて飛んでいき、帰らぬ人になったか。

飛行場は橋を渡った川向うにあった。生徒たちは、飛行場との往復をトラックで移動していたのかもしれない

ない。

今では、本田航空株式会社がそれを所有・管理し、軽飛行機専用の飛行場（ホンダエアポート）として活用している。ちようど、私がバス停に降り立った時、西側の空で軽飛行機が着陸態勢に入っているとところが見えた。

飛行場の近くには、当時の軍用施設の一部、コンクリート構造物がいくつかあり、見学できるという。私は、先ほどの職員からその案内マップを渡されていた。見ると、そこまでは荒川にかかる長い橋を渡っていかなければならないので、私はあきらめた。（今となって、後悔している）

この日の見学者は結局私一人だったことに、思いを巡らせた。この記念館は、たとえ見学者が一日にゼロであっても、そこに存在しているだけで意味があるのだろう。

帰りには、上下方向のバスの時刻をにらみ、早く来る方を選び、行きと同じバス路線で川越かわごえに出ることにした。川越から新宿（西部新宿駅）に行けるだろうと目論んだ。（実際にそうだった）

ついでに、以前にも来たことのある川越の街を観光する。「札の辻」でバスを降り、蔵造りの店が並ぶ街

をそぞろに歩く。蔵造りの商店街では、若い人でにぎやかだ。



川越・旧第八十五銀行本店
川越のもう一つの顔。

蔵だけではなく、観光スポットがいくつかある。旧第八十五銀行本館の偉容を目にすると、驚かされる。大正7年に竣工のビルだが、今でも、埼玉りそな銀行川越支店として機能している。

そして、わき道に入ると、偶然に「大正ロマン通り」

に出た。ネーミングがいいから、いつかそこを歩いてみたいと思っていた私のささやかな夢が実現した。それらしい町並みが確かにある。これも私にとって一つの、新しい発見だ。

⑩ 足立区に墜落したB29部品（東京都足立区）

2021/12/11

週刊新潮12月2号にある「埋もれた歴史」と題されたグラビア記事を読んで、さつそく私も12月11日（土）足立区へ見に行くことにした。その記事で詳しく紹介されているので、私が多くを語る必要はないのだが、残骸といえども、日本の各都市を空爆し、焼け野原にした爆撃機の遺品なので、この探訪シリーズに含めたいと思った。

タイヤは、足立区の入谷5丁目の農園にある。私は西日暮里から舎人ライナーに乗った。ほぼ4階建ビルの高さの高架をゴトゴト行くから、乗り心地はいまひとつとしても、見晴らしがいい。平地に広がって密集する東京の下町のように目を奪われる。ときどき水面の広い川を渡る。美しい街とは、お世辞でも言えないけれど……。

「舎人公園駅」で降りて歩いた。実は、次の駅「舎人駅」から歩いた方が目的地に近い（約10分で行ける）のだが、広々とした公園を歩くのもおつなものだ。

この舎人公園はそうとうに広い。約63ヘクタールあるという。公園だけでなく、陸上競技場など、スポーツ施設も作られている。東京都内にある広い公園は、軍との関連があったものが多いので、ウイキペディアで沿革を調べてみると、舎人公園の一带は、1941年に東京都によって防災緑地として整備がすすめられ、大半の土地が買収された。戦時においては、都市空襲による被害を軽減することを目的とされたから、軍用地ではないものの、やはり、戦争に関係していた。ただし戦時中、逼迫し始めた食糧不足の対応のため、土地を農民に貸与し、農作物生産を振興したとある。

タイヤが置かれた場所は、事前に得た情報通り、ビニールハウスが立ち並ぶ農園の一角にあった。角地に置かれているからわかりやすい。なお、この周辺は住宅地となっている。

昭和20年5月26日、例によって編隊を組み、大挙してやってきたB・29爆撃機の一機が火に包まれて墜落した。

火災の発生原因は不明とされている。実際の墜落現

場は、もっと南のほうだったが、当時、畑が広がっていた地域だったから、地上に大きな被害はなかった。11人の乗員中2人は墜落死、9人はパラシュート降下し、捕えられ、戦後8人が米国に帰還を果たしたが、一人は、かけつけた消防団員たちをピストルで殺害したため、拘束後、引き渡された憲兵隊によって斬首された。戦後、捕虜を殺した罪によって彼らは戦犯に問われた。命令に従って実行した者が、命令した者より一番罪が重かったこと（それぞれ懲役10年、懲役12年）が興味深い。命令した者が責任を取らなければいけないはず。

このタイヤは、週刊新潮の取材によると、畑の所有者の証言として、当時の住民が風呂の燃料として用いようと現場からこれを拾ってきた（転がしてきたのだろう。略奪的でもある）が、硬くて切れないから、竹やぶに投げ捨てていた。しばらく忘れ去られていたが、区画整理の時に出てきて、畑と道路の間の緩衝材としてここに置いたものだろう。

タイヤには前輪用と主脚用があるが、これは56インチの大きさがあり、主脚用タイヤの一つだ。かなり良好に原形をとどめており、表面の浮き出し文字が読める。



墜落したB-29のタイヤ
その後、住民がここ（足立区入谷5丁目）
に埋めたもの。

次に、足立区立郷土博物館に向かった。同じ足立区でありながら、遠く離れている。いったん西日暮里に戻り、千代田線で北綾瀬駅に出てから、やや長い道のりを歩いた。途中、足が痛くなってきたのには難儀した。

やっとたどり着いた足立区立郷土博物館は、比較的立派な、城を模した建造物だ。裏側に、東洲江庭園と

いう、なかなか趣のある日本庭園がある。
館内は広く、壁際に整然と工芸品や書など展示品が置かれている。それらを一瞥したあと、二階に上がる
と、戦時に関連したコーナーに、同じ機体のプロペラ・ブレードの一枚が、ガラス越しに見える。



墜落したB-29のプロペラ
これ一枚で、重さ30キロ、長さ150
センチある

先端が欠け、表面の光沢が失なわれているのは、墜落の激しさのためだろう。

これも後から出てきたもので、個人所有者が地面の中から発見したものを、結局、博物館に寄贈したという。
この展示コーナーに、墜落した搭乗員の追悼の碑などが置かれていることを私は後から知った。あのタイヤも、ここに並べて置けば、ちようどよさそうだ。